

黒田如水と太宰府天満宮  
——彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に——

ダニエル・ストラック

Kuroda Josui and Dazaifu Tenmangū:  
With special reference to his Tenjin Faith and donation  
of the “Three Bridges”

Daniel C. Strack

Abstract

While Kuroda Josui's generous contributions to Dazaifu Tenmangū have been commonly acknowledged, the fact that he donated the “Three Bridges” to the shrine in 1602 is less well known. According to tradition, the “Three Bridges” symbolize the Buddhist idea of the unity of past, present and future worlds. While Buddhists are welcome to interpret the “Three Bridges” in this way, it is unlikely that this was the significance Josui intended when making his donation to the shrine. Josui was a devoted Christian both during his stay in Dazaifu in 1602 and 1603 and thereafter until his death in 1604. It is this fact that makes his enthusiastic support of Dazaifu Tenmangū and its Tenjin Faith all the more remarkable.

Examining the details of Josui's period of residence in Dazaifu offers unexpected insights into his motivations for offering such unprecedented support. While there can be no doubt that he engaged extensively in composing and promoting *Haikai no renga* during his stay, there is

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

evidence that his sojourn included certain surprising religious aspects. With Hideyoshi's 1587 Edict expelling Catholic missionaries from Japan still in effect, Josui appears to have been using his time in Dazaifu to make surreptitious contact with itinerant Catholic priests. Jesuit records indicate that at the very time of Josui's stay in Dazaifu, Pedro Ramon was traveling around northern Kyushu visiting believers after having been temporarily driven out of Hakata by Josui's son, Nagamasa.

Testimonial evidence would appear to indicate that aside from hosting religious meetings with other Christians at his personal residence, Josui was attempting to establish a syncretistic connection between Catholicism and the Tenjin Faith. The discovery of a statue of the Tenjin featuring an engraved cross and a deftly hidden Virgin Mary image in Dazaifu Tenmangū's religious artifact repository represents further evidence that such efforts were indeed made.

In light of Josui's syncretistic promotion of the Tenjin Faith, a new and startling interpretation of the "Three Bridges" emerges. Juxtaposed as they are with the *Shinji-ike* (a pond shaped like the Chinese character for the human heart), crossing them would appear to symbolize a movement toward purification through a supernatural encounter with the Triune God of Biblical tradition. While such an interpretation has much to recommend it, offering this perspective as an alternative does not preclude the relevance of traditional explanations. Rather the new viewpoint should be seen as an until now unacknowledged spiritual dimension that can only add to the richness of Dazaifu Tenmangū's already storied cultural and religious heritage.

## ダニエル・ストラック

## 一章 福岡藩の父、黒田如水と太宰府天満宮の関係について

太宰府天満宮にとって、黒田如水は「社運隆盛の大恩人」<sup>1</sup>であった。江戸初期において地元の社寺の後援者になっていた大名の例は少なくないが、福岡の初代大名黒田長政の父であった如水<sup>2</sup>の太宰府天満宮への財政的支援は、その程度を考慮すれば、「破格の厚遇」<sup>3</sup>であったといえる。

元亀元年（一五七〇年）から天正六年（一五七八年）まで、太宰府を含む筑前国は大友宗麟の勢力範囲内にあったために九州北部は比較的平穏であったが、宗麟と薩摩の島津義久との対立によって筑前国の治安は次第に悪化していった。特に肥前の龍造寺隆信が九州北部に進出するようになってから、秋月種実が大友から離れ、天正六年（一五七八年）には秋月が「太宰府を焼き払い、ついに島津と手を結んだ」。<sup>4</sup>大友を救助するために思案された豊富秀吉の九州平定の後、筑前守となった小早川秀秋は太宰府天満宮の社領を千石から七百石に減じていた。<sup>5</sup>治安こそ良くなったとはいえ、天満宮には破壊された状態から復興するための資金は無くなってしまった。関ヶ原以後、この経済的苦痛ゆえに太宰府天満宮の宮司務別当<sup>6</sup>として勤めていた大鳥居信岩は、筑前大名となった黒田家を味方につける必要性を感じていたに相違ない。

しかし、大鳥居が黒田家と良好な関係を築くためには一つの心理的な障害があった。それは、大鳥居と如水の初対面の時に遡る。慶長五年（一六〇〇年）十月下旬、秀吉の軍師として活躍していた如水が立花宗茂の居城であった柳

<sup>1</sup> 三浦、130。

<sup>2</sup> 彼の生涯において黒田如水は多数の名前に名乗っていた。本論文において「孝高」、「官兵衛」などという名前は必要に応じて使用されるが、別名が如水であることを表すためにその名の直後に「(如水)」という記述を置くことにする。

<sup>3</sup> 広渡、6。

<sup>4</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、33。

<sup>5</sup> 棚町「黒田如水の連歌」、23。

<sup>6</sup> 大鳥居が宮司務別当として任命された天正十六年（一五八八年）のことである。（棚町、「黒田如水の連歌」、23。）

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

川城を落城させた。その際、柳川城付近にあった筑後水田天満宮の宮司として兼務していた太宰府天満宮の大鳥居が如水と初めて対面したが、皮肉にも大鳥居の妻は柳川城主立花の娘であったのだ。<sup>7</sup> 棚町によると、柳川城落城の僅か三ヶ月後に、筑前入りしたばかりの如水は大鳥居と京都の雅会に一座していた。<sup>8</sup> そして、二人の雅会参加の数ヶ月後に、如水は太宰府天満宮の傍らに自分の隠宅を造らせた。結局、如水は「福岡城内の居館落成まで」<sup>9</sup> 太宰府に過ごすこととなった。

古来から太宰府天満宮は、多数の文人が訪れ、「万葉集」に登場するほど文芸的な名残りのある場所であり、多数の歌人が太宰府を訪問していたことを如水が知らなかったはずがない。逆にいえば、文人ゆかりの地である太宰府の伝統こそは俳諧の連歌に対する興味をもっていた如水を惹きつける条件の一つであっただろう。しかし、文芸的知名度以外でも、如水を魅了した更なる特徴はあったと考えられる。棚町は如水の太宰府への招待に関して、以下の通り説明している。

如水五十六才、信岩三十才、年こそ違い、如水と信岩の交遊には、こまやかなものがあつた。信岩との雅交が如水の太宰府隠棲を誘ったのではないかと考えたい位である。<sup>10</sup>

如水と大鳥居の親密な関係ゆえか、筑前守は太宰府天満宮に対して「入国当初千石に復し、其の後重ねて千石を加え、二千石とした」。<sup>11</sup> つまり、太宰府に滞在しようとした主な理由は何であれ、結果として如水は「長年の戦乱によって荒廃」していた天満宮に対して、「中門や回廊を造営し、社領を加増するなどとして、その復興に尽力」<sup>12</sup> したのである。そのため、天満宮

<sup>7</sup> 棚町「黒田如水の連歌」、23。

<sup>8</sup> 棚町「近世文芸資料と考証、五」、23。

<sup>9</sup> 川添『太宰府天満宮連歌史／史料と研究Ⅱ』、161。

<sup>10</sup> 棚町「近世文芸資料と考証、五」、23。

<sup>11</sup> 棚町「黒田如水の連歌」、23。

<sup>12</sup> 古賀「太宰府人物志・資料室だより(66)」。

ダニエル・ストラック

の如水に対する感謝の意は深く、彼の没後、「その命日に追懷の連歌会」<sup>13</sup>を催すほどであった。

現在において、太宰府天満宮の必見の一つは「三橋」である。(図1を参照。)



図1 太宰府天満宮にある「心字池」に架かる「三橋」。本殿への参拝者は表参道から鳥居を潜って、写真の右から「太鼓橋」、「平橋」、「太鼓橋」という順で渡る。

二〇一三年現在、「三橋」は太宰府天満宮を代表する財宝となっているが、日本の統一に多大に貢献した大名黒田如水によって寄進されたものであることは意外にも知られていない。如水が三橋を奉納したことは天満宮が保管している文書によって裏付けられている。一九七〇年代、松田重雄がキリシタン文化に関して研究を行っていた際に、太宰府天満宮の井上正彦宮司を訪問し、大鳥居信岩時代の書状などを紹介してもらった。松田の著書には、如水の太宰府天満宮に対する「三橋」の寄進状の内容が掲載されている。該当す

---

<sup>13</sup> 古賀「太宰府人物志・資料室だより (66)」。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

る寄進状の内容は以下の通りである。

「天満宮 留守大鳥居殿

黒田如水（注＝孝高）寄進状

口 上

寄付桜門 三橋造営入目銀子壱貫七百目米九拾石七斗令寄進候 此外米  
百式拾式石 甲斐守令寄進者他 如水軒 花押

慶長七年十二月十八日

大鳥居信教法印 御同宿中」<sup>14</sup>

注目すべき点の一つは、「三橋」という名称である。寄進した時点において如水が予定していた建築企画の形態はすでに「三橋」になっていた。つまり、太宰府天満宮において三つの橋が連続的に配置されたのは偶発的事情によるのではなく、最初から意図されたデザインであったのである。

そして、もう一つの興味深い事実がある。松田によると、上記の寄進状の割印に、外丸内にローマ字で如水と書いている「十字印」が押されていた。<sup>15</sup> 棚町によると、如水が太宰府天満宮に居住した公式の動機は「天神崇敬」<sup>16</sup>であったにも関わらず、滞在期間の直後に如水が太宰府天満宮に対する寄進状の割り印に押した印鑑がキリスト教徒の証しとされる「十字印」であったことは辻褄が合わない。「天神信仰」に対して公に支持の立場を示していた時期にも関わらず、如水のキリスト教に対する信仰は不動であったことが伺われる。

「三橋」の意味に関して、太宰府天満宮が無料で配布している観光案内の説明は次の通りである。

「心字池・太鼓橋

---

<sup>14</sup> 松田、130。

<sup>15</sup> 松田、130。

<sup>16</sup> 棚町「黒田如水の連歌」、23。

ダニエル・ストラック

過去・現在・未来を渡る橋

漢字の「心」の字を象った池に架かる御神橋は、太鼓橋、平橋、太鼓橋の三橋。手前から過去・現在・未来を現わし、三世一念の仏教思想を残したものと伝わります。朱色の欄干を持つ太鼓橋は急な勾配で、反り橋とも呼ばれ、この橋を渡ると心身ともに清められるといわれています。」

(『太宰府天満宮&九州国立博物館』の「境内参詣」から)

また、太宰府天満宮境内にある「三橋」の袂にある案内板は以下の通り説明している。

「心字池と太鼓橋

この神池は「心」という字をかたどったものであり、太鼓橋と直橋の三つの神橋は、仏教思想という過去・現在・未来の三世一念の相を現わしたものである。この池の橋を渡ることによって「三世の邪念を祓う」ともいわれ、参拝者の身を清める橋である。」

(太宰府天満宮境内の案内板から)

意外にも、観光案内用配布物においても、案内板においても、福岡黒田藩の初代大名長政の父で、太宰府天満宮の大恩人であった如水が「三橋」を寄進した事実への言及がない。

また、造営者如水の名が挙げられていない点の他に、案内文における「三橋」の意味の説明に関して、如水が仏教徒であったならば、三橋を「三世一念の仏教思想」の表現として「残した」ことは容易に認められるが、後述の通り、如水は熱心なキリシタンであったために、この説明には疑念の余地がある。日本の神社において単独の太鼓橋は頻繁に見られるが、極めて珍しい建築物である「三橋」を寄進した如水には一体何の目的があったのだろうか。

本論文は黒田如水の宗教心及び太宰府天満宮における滞在期間を検討することによって、「三橋」の意味づけについて詳しく検証したい。まずは、如水の信仰について検討し、次に如水の太宰府天満宮滞在期間の詳細、そして

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

最後にそこから見えてくる「三橋」の意味について論ずる。

### 二章 如水の信仰生活について

如水の墓が福岡市博多区の黒田家菩提寺である崇福寺にあることから、如水は禁教後にキリスト教を捨てて仏教に改宗したと誤解されている人は多いだろう。しかし、カトリック教会の記録によれば、如水は最後まで敬虔にキリストへの信仰心を持ち続けていたようである。如水は遺言の中で、筑前守であった息子の長政に対してキリスト教の葬儀を依頼したのみならず、彼を記念するために「美しい天主堂」（キリスト教会）を立てるようにも願った。<sup>17</sup> その天主堂の建設を許可した長政は後にキリスト教弾圧に転じた際にその教会を破戒させ、如水の遺骨を菩提寺に移したと推測されている<sup>18</sup> が、クリスチャンとなった如水が生きていた間、彼の信仰生活は仏教とほとんど無縁であったことは歴史家の間で広く認められている。<sup>19</sup> 本山一城によると、官兵衛（如水）は「子供の頃に円満寺の僧から手習いを受けたと伝えられるほか、神社関係者との交流はあるが、仏僧との関係が見出せない」。<sup>20</sup>

このように、如水は寺や僧らとの関係はほとんどなかったとはいえ、彼は非常に積極的に神社との関係を築いていた。例えば、播磨国時代の黒田家は姫路にある播磨国総社や広峯神社との縁が深く、当地の平定の祭に官兵衛（如水）は羽柴秀吉に対して、松原八幡神社が存続するように進言したことがある。<sup>21</sup> また、天正十七年（一五八九年）五月、如水から家督を受け継いだ長政は、豊前国にあった「宇佐八幡宮に対して神領三〇石を寄進し、新社殿を造営した」。<sup>22</sup> しかしこのような前例があったにも関わらず、如水が好意を最

<sup>17</sup> 藤野、150。

<sup>18</sup> 三浦、135。

<sup>19</sup> 広渡、5-7、本山、55。

<sup>20</sup> 本山、55。

<sup>21</sup> 姫路市観光交流推進室編集「智謀の将／黒田官兵衛」、3。

<sup>22</sup> 宮内、65-66。

ダニエル・ストラック

も寄せた神社は太宰府天満宮であった。<sup>23</sup> 太宰府天満宮への彼の崇敬の有り方を詳しく検証するために、「天神信仰」及び太宰府天満宮の歴史に関して、以下に略述したい。

現在の日本で知られている天神信仰は基本的に平安時代の文人、中央政府の官僚として勤めた菅原道真に対する信仰である。道真が神まで上格された経緯は次の通りにまとめることができる。醍醐天皇と藤原時平の陰謀に巻き込まれた道真は平安京から九州の太宰府に左遷された。<sup>24</sup> 太宰府は歴史的にアジア外交や防衛において重要な役割を果たしていた政府機関であったとはいえ、すでに年老いた道真にとって九州のこの地は「終身刑」の地となってしまった。案の定、道真は京都に帰らぬ人となったが、彼の没後に起こった出来事は誰も予測しないものであった。河音能平は次の通り説明している。

菅原道真は延喜三年（九〇三）二月二十五日太宰府で死去するが、その後中央政府では、延喜九年（九〇九）に藤原時平が三十九歳で死去し、更に延長二年（九二三）三月皇太子保明親王が二十一歳で死去した。ひきつづいて二年後その子息皇太子慶頼王も五歳で死去した。このようなたび重なる時平系人脈の死去は、道真の怒霊のなせるわざとして貴族たちに恐れられた。<sup>25</sup>

更に宮中において落雷事件が起こると、この不幸な出来事の連発はやはり道真の「怒霊」による現象であるという神話が出来上がる。時平の道真に対する残酷な扱いのためか、神化への勢いが増し、その結果、北野天神社をはじめ、一般民衆の間、日本各地に道真の怒霊を鎮静するために彼を祀る天満宮が開かれた。<sup>26</sup> 結局、道真の墓地のために創建された安楽寺も天満宮の一

---

<sup>23</sup> 広渡、6。

<sup>24</sup> 外山、76。

<sup>25</sup> 河音、136-137。

<sup>26</sup> 河音、143。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

つとなったが、それが太宰府天満宮の始まりであった。<sup>27</sup>

日本の天神信仰は主に一人の政府関係者を死後に祀るための宗教ではあるが、時間の経過と共に、より「超越的な」信仰へと転向したといえる。その経緯について、河音は次の通り説明している。

宮中への落雷事件は自然現象としての偶発的事件にすぎないが、当時の人々にとっては道真の怨霊＝火来天神として位置づけられるようになった。(中略) 火来天神は、都の貴族には落雷の恐怖と災いをもたらす恐ろしい怨霊であったが、一般民衆にとっては、ある恐怖をともなうとはいえ、慈雨をもたらす招福神であった。(中略) 天神信仰は、前代の御霊信仰とはことなっており、より超越的な力をもった菅原道真の超怨霊＝火来天神・大富天神への積極的な信仰であった。<sup>28</sup>

つまり、道真を祀る御霊信仰（人の怨霊を鎮静する信仰）として始まった「天神信仰」には、「人と神との相互関係」<sup>29</sup>をもつ特色を示すようになったために、通常の御霊信仰の枠を超えて、天候を左右する力もある神、より超越的な神を祀るようになった。道真が文人であったために、現在では太宰府天満宮は主に「学問の神様」を祀る神社として考えられているが、御霊信仰という原点に関わらず、火来天神や大富天神という要素が含まれているのは、道真の学者としての身分とは無縁である。

また、日本の「天神」のすべては道真に由来するといえば、そうではないようである。上田正昭によると、「北野天神の祭祀以前に、すでに北野の地に「天神」を祀る事例のあったことを見逃せない」<sup>30</sup>と説明している。更に、上田によると、日本における「天神」は部分的に「唐風の天神」からエッセンスを受け継いでいる。

---

<sup>27</sup> 外山、76。

<sup>28</sup> 河音、136-137。

<sup>29</sup> 河音、137。

<sup>30</sup> 上田正昭、6。

## ダニエル・ストラック

天神さまといえば、北野天神・天満天神（大阪）・太宰府天満宮などの神々が有名である。（中略）だが、天神のいにしえは必ずしも菅公の天神のみによって形づくられていたのではない。中国の天神・地祇としての天神は、昊天（皇天）上帝をはじめ日・月・星辰・風師・雨師などを含み、文字どおりの天上の神であって、『古事記』や『日本書記』などにみえる天神としてのそれではなかった。<sup>31</sup>

つまり、日本各地に見られる「天神信仰」を促している天満宮は道真の怒霊を鎮静するための宮であるとはいえ、「天神信仰」そのものの定義は曖昧で、多数の解釈を許すような、極めて柔軟な宗教的観念である。当然、この事実は如水の時代においても同様であった。

如水は、道真の怒霊が成したといわれる出来事を描き、天神信仰の基本を視覚的に表象している巻物である「天神縁起絵巻三巻」を太宰府天満宮に奉納している。<sup>32</sup> このことから如水は、道真と天神信仰との関係を正しく理解していたと考えられる。しかし、如水の天神崇敬に関して考慮する際に、もう一つの前提を視野に入れなければならない。それは太宰府天満宮に隠棲した時期と重なる如水のキリシタンとしての信仰生活である。神道に対して親しみをもっていた如水であるが、彼は「天神信仰」の柔軟性の中にキリスト教の「天の神」を崇拝できる余裕を感じていたことは容易に推測できる。<sup>33</sup>

如水がキリシタン大名であったことに対して「一般に馴染みが薄い」<sup>34</sup> ことであっても、如水の信仰の熱心さは歴史家の間に一般に認められている。三浦明彦は如水のキリシタン信仰の程度に関して次の通り述べている。

<sup>31</sup> 上田正昭、3。

<sup>32</sup> 『黒田如水／西日本人物誌』、130。

<sup>33</sup> 秀吉に厚く用いられて薄く報われた如水は、道真に対して何らかの親近感をもっていただろう。更に、如水が道真の死去地であった太宰府を訪問することを通して、彼の軍事的賢明さを警戒していた徳川家康に対して、道真と同様に如水の死後に彼の「怨霊」が浮上する可能性を僅かながら余韻を響かせていたかもしれない。

<sup>34</sup> 三浦、132。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

如水が信者であった時代は、我が国におけるキリスト教の全盛期であり、数多くの大名、武将がキリスト教に入信、受洗している。特に博多、平戸、長崎といった国際貿易港を有する九州地方はキリスト教の繁栄地となっている。(中略) 如水自身の信者としての動きであるが、他者を入信に導いた他、中津城下や福岡城下に教会(天主堂)を建設したりしている。

また、生涯に一人の妻のみ愛し続けたことは切支丹らしいところである。そのほか、自身の書状にローマ字印を使うなど、切支丹らしくハイカラな面を見せている。そして、その死後には教会への埋葬を遺言で示唆している。<sup>35</sup>

カトリック教会の記録によれば、如水が洗礼を受けたのは、天正十二年(一五八四年)<sup>36</sup> ごろであったが、彼のキリスト教入信が実は天正七年(一五七九年) 以前にあった<sup>37</sup> など、受洗前入信説が多数見られる。<sup>38</sup> この

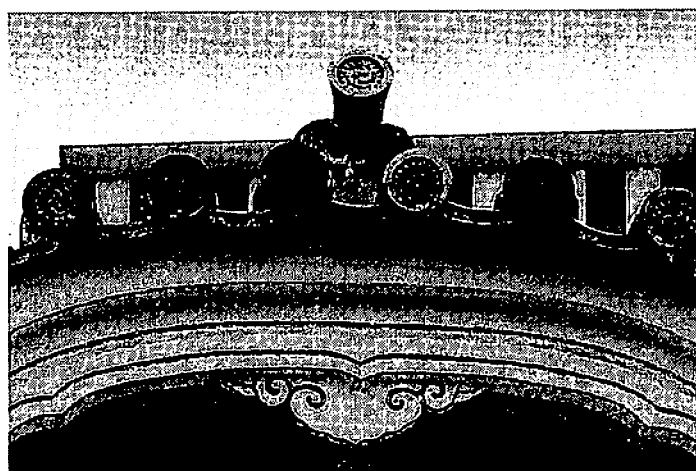


図2 姫路城「に」の門の鬼板瓦にある十字紋。<sup>39</sup>

<sup>35</sup> 三浦、132-133。

<sup>36</sup> 上智大学編纂『カトリック教大辞典第1巻』、792。

<sup>37</sup> 三浦、132。

<sup>38</sup> 安高、17。

<sup>39</sup> 掲載写真は姫路市観光交流推進室から提供されたもの。

## ダニエル・ストラック

説の裏付けは様々であるが、黒田家と密接な関係のあった姫路城の瓦にある十字紋が証拠の一つとして挙げられる。(前ページの図2を参照。)

現在の姫路城は池田輝政によって築城されたが、元々、同じ姫山に小規模の出城があった。<sup>40</sup> 小寺政職の家臣であった如水の祖父、そして父はこの出城の城代として勤めていたために、天文十五年(一五四六年)、如水はこの出城で生まれた。<sup>41</sup> 永禄十年(一五六七年)、孝高(如水)は家督を継いで姫山出城の城代となり、天正五年(一五七七年)には羽柴秀吉の播磨攻めの祭に、如水がこの出城を守っていた。やがて天正八年(一五八〇年)、出身地でもあったこの城を秀吉に譲ったが、姫路市観光交流推進室の刊行物によると、姫路城の「に」の門の鬼板瓦には「官兵衛が使った十字紋が焼き付けられて」<sup>42</sup> いる。具体的な記録は残されていないとはいえ、キリシタンであった如水が長年姫路城と関わりをもっていたために、この十字紋は洗礼を受ける時点以前でも彼がすでに入信していた証拠として位置づけられる。

濱名志松によれば、秀吉のバテレン追放令<sup>43</sup>にも関わらず、中津城を築城した後の如水はキリスト教会に対して金銭的、物資的支援を手厚く行っていた。例えば文禄二年(一五九三年)頃、イエズス会に対して「黄金千百枚、米六百俵を寄進した」<sup>44</sup>と記録されている。本山によると、新領地において如水は「3千人を集めて、教会堂を建て(中略)ここで弟の利高、直之、息子の長政、大友義統、毛利秀包、熊谷元直らを洗礼に導いている」。<sup>45</sup> 如水がカトリックの宣教師を積極的に領内に招いたために、(細川忠興が領主となった間を含めて)「黒田如水の中津入り以来約二十四年間、特に慶長年間、

<sup>40</sup> 秋枝、8。

<sup>41</sup> 姫路市観光交流推進室編集配布物「その男、天下に秘する野望あり」より。

<sup>42</sup> 姫路市観光交流推進室編集配布物「智謀の将 黒田官兵衛」より。

<sup>43</sup> 天正一五年(一五八七年)六月一七日に発令された、筑前国の箱崎宮にいた秀吉のこの追放令はバテレン(伴天連=神父)を日本から追い出す目的があった。

<sup>44</sup> 上智大学編纂『カトリック教大辞典』、792。

<sup>45</sup> 本山、54。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

中津はキリシタンの最盛期であった」。<sup>46</sup>

また、関ヶ原以後、長政が筑前守となってから、神父が名島城を訪れた後に、博多に新しい教会を建築するようになった。福岡城が築城されている間、如水は太宰府天満宮に滞在していたことが知られているが、カトリック教会側の記録によれば、同時期の如水は積極的にイエズス会の「博多教会」の活動を支援していた。例えば、慶長七年（一六〇二年）において長政はイエズス会に壮大な土地を寄進した<sup>47</sup>が、これはおそらく如水の推薦による行為であったと考えられる。また、一六〇二年度のイエズス会年報でマトス神父は次の通り説明している。

我らの住院の隣に、日本の習慣で鉄の鍋を作る鋳物屋が居たが、その仕事のうるさいことで不快であったので、官兵衛殿は彼を移転させた。<sup>48</sup>

現在、福岡市民の間にはほとんど知られていないようだが、如水のこの活躍のために、慶長年間において「長崎に続いて博多がキリシタンの本拠地になっていた」<sup>49</sup>といえる。博多がキリスト教伝道の拠点となったのは、如水の援助なしではなり得なかったと考えられる。

一六〇〇年の戦乱の中でも、如水がキリシタンとしての態度を著しく表したことについて前に述べたが、その後も教会側の記録の中で、毎年、官兵衛殿シメオンとか如水シメオンとかの名があげられているのは、彼がキリシタンとして抜群であったことを充分あらわしているのである。<sup>50</sup>

当時、如水の信仰が有名であったことも、如水の死後、黒田家が如水のキリスト信仰の事実を抹消したことも、慶長九年の宗儒賛作の「黒田如水像」という巻物によって立証される。安高によると、「耶蘇宗門」や「南蛮宗門」

---

<sup>46</sup> 濱名、692。

<sup>47</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、112。

<sup>48</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、114。

<sup>49</sup> De Luca、110。

<sup>50</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、19。

## ダニエル・ストラック

といった、入るはずの文字が贅文から無理に消されていることは「福岡藩が官兵衛のキリスト教信仰の事実を抹殺しようとしたことを示している」<sup>51</sup> ということだ。

ところが、徳川時代のキリシタン禁制のため、黒田家の記録も、その他の諸史料も、彼のキリシタンたることを全く抹消してしまった。<sup>52</sup>

福岡のキリシタンの歴史を伝える日本側の史料がほとんど残されていないのは、後世の黒田藩のキリスト教歴抹消への熱意の由縁であるといえる。

しかし如水の信仰を示すすべての証拠がキリスト教弾圧時代の黒田藩の方針によって消されたということではない。例えば、二〇一〇年五月一七日の西日本新聞の夕刊に掲載されている記事の通り、福岡城の下の橋大手門などの瓦の一部に刻印されている十字架が元市教委文化財担当職員の井澤洋一によって発見されている。<sup>53</sup> また、如水の身の回り品には、十字架のついているものが多く見出されている。<sup>54</sup> 結局、如水が派手な性格の持ち主であったからこそ、彼の十字架に対する敬意は様々な形で残されてしまったのである。

### 三章 太宰府天満宮での滞在期間に関して

太宰府天満宮での如水の隠棲期間に関する具体的な史料が少ないために、正確に把握することは困難であるが、「三藐院記」、「鹿苑日録」、「宗湛日記」など、当時の史書を調査すれば、長政が筑前的大名になった後の如水の滞在先は部分的に特定できる。

慶長五年十二月十一日に筑前入りした長政及び父である如水が名島城に入城し、その後に正月を名島城で過ごした。如水が名島城を去った期日は不明だが、慶長六年二月二日において如水が大坂で徳川家康と面会した記録は

<sup>51</sup> 安高、17。

<sup>52</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、19。

<sup>53</sup> 「福岡城 瓦に「十字架」」『西日本新聞』2010年5月17日。

<sup>54</sup> 安高を参照。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

残っている。<sup>55</sup> 同年五月六日付で京都在住であった近衛信尹を訪問し<sup>56</sup>、そして五月二十五日に福岡に帰る直前の連歌会を催した<sup>57</sup>ことから、如水の太宰府天満宮での滞在期間の開始日は早くとも慶長六年六月上旬であったと考えられる。

また、慶長七年十一月九日、長政の長男が福岡城東の丸で生まれた際に、如水はすでに福岡城三ノ丸の隠宅（現舞鶴公園内御鷹屋敷跡・牡丹芍薬園）に移住していたことから、太宰府天満宮に隠居していた時期は最長でも慶長六年六月から慶長七年十月ごろまで続いていたと推測できる。ただし、「三藐院記」、「鹿苑日録」などに記録されている如水の社交的活動から分かる通り、彼は少なくとも慶長七年三月二十一日から同年九月十二日の間に筑前国にいなかった。京都の黒田邸などにいた間を除けば、太宰府での滞在可能な期間は長くとも十一ヵ月程度である。しかし、その間も如水が連続的に太宰府に滞在したとは限らない。それは、築城の名手であった如水は数回に渡って福岡城の建設現場を見に行った可能性は高いからだ。太宰府は博多から二十五キロ離れており、当時では半日の旅であった。<sup>58</sup>

如水の太宰府での滞在期間は推測の域を出ないとはいえ、滞在中に起こった多数の興味深い出来事の記録が残っている。例えば、慶長七年正月十六日付で、福岡の連歌会において如水が起案した著名な俳諧の連歌「夢想之連歌」が執筆された。この俳諧の連歌の中に「ふく岡」という地名が登場しているが、これは筑前の土地を「福岡」と呼んだ史上初の記述である。当然、該当の新地名への言及は如水自身が詠んだ一句の中にある。「夢想之連歌」が詠まれた連歌会に出席したのは、黒田家及び如水の知人数人であったが、太宰

<sup>55</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、20。

<sup>56</sup> 『三藐院記』、78。

<sup>57</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、21。

<sup>58</sup> 棚町「黒田如水の連歌」、25。

<sup>59</sup> 棚町「大御神忌と連歌」、9。

ダニエル・ストラック

府天満宮の大鳥居信岩も参加したメンバーの一人であった。<sup>59</sup>

また、「三藐院記」によると、慶長七年二月二十五日は道真の七百年忌<sup>60</sup>であった。如水の隠棲期間の真唯中の行事で、如水が太宰府天満宮のこの行事に参加したことは容易に推測できる。

如水の太宰府天満宮での隠棲期間が終了しても、彼の援助はなお続いた。以上に説明した通り「三橋」の寄進状の日付は慶長七年十二月八日になっているために、「三橋」の奉納は如水が福岡に居を移してからのものであった。ただし、寄進状の詳細を見ると、如水は大鳥居と「御同宿中」<sup>61</sup>であったために、寄進の時点において大鳥居は福岡城の隠居（「如水軒」）に滞在していた可能性が高いと考えられる。このような事実は如水と大鳥居の親しい関係を更に裏付けるものであると考えられる。

結局、如水の太宰府での隠宅は、彼の死後、慶長九年三月に大鳥居に下渡され、大鳥居自身がそこに住むようになった。<sup>62</sup>後にその堀に囲まれている「隠宅址」が「竹木繁茂し」、明治十二年まで「荒蕪の地」として残ったが、岩踏川の上流から心字池に水路を加えるために工事が行われた際に、「隠宅址」の堀、石垣などが撤去された。<sup>63</sup>現在において、残されている隠宅址の部分は、「御茶の井」（「如水の井戸」）のみである。（次ページの図3を参照。）

如水が太宰府天満宮に滞在した「公式の動機」は「天神崇敬」と「連歌生活」であると一般に認められている。<sup>64</sup>太宰府天満宮は天神信仰の拠点の一つであるために、前項の動機は当然かもしれないが、「連歌生活」という動機に関して更に説明する必要があると考えられる。

日本史において如水は主に有能な戦国武将として記憶されているが、茶の

<sup>60</sup> 『三藐院記』、90。

<sup>61</sup> 松田、130。

<sup>62</sup> 小野、24。

<sup>63</sup> 小野、24。

<sup>64</sup> 棚町「黒田如水の連歌」、23。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

湯において利休の七人の弟子の一人でもあり、また当代最高と思われた侍文人細川幽斎から歌学を勧められた<sup>65</sup> 文人でもあった。少年時代から古典文学に精通していた孝高（如水）は慶長三年（一五九八年）ごろから俳諧の連歌に対して熱心な興味をもつようになった。<sup>66</sup> このような文芸に対する傾倒があったからこそ、大鳥居との雅交が始まり、太宰府天満宮に滞在することになったかもしれない。

如水の時代より以前の太宰府における「連歌屋」の状況は把握し難いが、如水の援助によって「連歌屋」が繁栄時代へと向かったことは確実である。木山紹宅という歌人は如水の以前からの知り合いであったが、連歌屋の初代屋主として任命されたのは紹宅の息子紹印<sup>67</sup> であった。紹印は、如水の援助を通して、「連歌屋を再興して（中略）太宰府天満宮連歌の興隆に尽くし」



図3 「如水の井戸」（慶長年間における隠棲館の所在地）

<sup>65</sup> 諏訪、19。

<sup>66</sup> 川添『太宰府天満宮連歌史／史料と研究Ⅱ』、161。

<sup>67</sup> 棚町「黒田如水の連歌」、13。

ダニエル・ストラック

たのみならず、「以後代々の黒田家が大きくかかわる基を築いた」。<sup>68</sup>

キリシタンであった如水の「天神」に対する思想も注目すべきであると考えられる。晩年の如水には「自由な宗教観」<sup>69</sup>があったと伝えられているが、正確に言えば、如水は無差別的にどの宗教も受け入れる姿勢を示していたというよりも、キリスト教と神道とを習合する意欲を見せていた。如水の太宰府における宗教活動及びキリスト教を神道と習合する必要性に関して以下の通りまとめておく。

一九七〇年代、太宰府天満宮を訪問した松田が井上宮司から如水の習合的な信仰生活に関して説明を受けたが、その内容は次の通りである。

さらに天満宮境内の一角に案内され、この地は如水が晩年に寓居をかまえた屋形跡です、と、いろいろ説明された。如水は幕府の弾圧にもめげず晩年の二年間この聖地に住み、連歌会など催し余生を信仰一途に送っていた。旧教の「天の神」を「天神様」によく習合し、表面上天神信仰にことよせ、毎月二十五日は天神講と称し、同信者とのあずまやで、月例行事・ミサ・洗礼・聖書の研究などを行った。<sup>70</sup>

この証言が正しければ、如水の太宰府天満宮での滞在の更なる非公式な動機が見えてくる。それは、密かにキリスト教信仰を守ることであった。

秀吉の死後とはいえ、バテレン追放令は解除されていないままであった当時において、如水は相変わらず水面下においてキリスト教の布教に勤めていた。前述の通り、慶長七年（一六〇二年）において、神父の博多での住居は一時的に認められたが、博多の仏僧が神父たちの在留の事実を長政に訴えたため、家康の反応を恐れた長政が怒り、神父たちは博多から久留米に逃げなければならなかった。<sup>71</sup> しかし、同年報によると、如水は長政の姿勢に対し

<sup>68</sup> 川添『太宰府天満宮連歌史／史料と研究Ⅱ』、161。

<sup>69</sup> 大村、49。

<sup>70</sup> 松田、128。

<sup>71</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、112。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

て不満を抱いていたために、一定の期間が経ってから長政は神父たちの博多滞在を再度許可した。神父たちがレジデンシア（神父住居）に改めて住むようになったのは慶長八年（一六〇三年）のことであるため、彼らの活動拠点が久留米になっていた時期はちょうど如水が太宰府に滞在した時期と重なるのである。

カトリック教会では、神父の不在中に信者が勝手にミサを行うことは固く禁じられているために、松田の著書が主張しているように如水の太宰府隠宅中にミサが行われたということは、神父の定期的な訪問があったことの証である。教会の記録では神父の太宰府天満宮への訪問に関する記述は一切見出せないが、イエズス会の活動歴の中にその可能性をほのめかしている記録はある。太宰府天満宮の如水庵に訪問したと推測できる神父の有力候補はペドロ・ラモン神父（Pedro Ramon; 1549-1611）<sup>72</sup>である。

一六〇四年十一月二十三日付のイエズス会年報によると、ラモン神父は如水の没後において彼のカトリック教式葬儀を司式した人物でもある<sup>73</sup>が、ユベルト・チースリクによると、「一六〇一、〇二年に、長崎から一人の神父と一人の修道士が九州北部のキリシタンを歴訪することになったが、佐賀と筑前、筑後などを巡回したのはラモン神父であった。」<sup>74</sup>「日本語によく通じており説教もできる」<sup>75</sup>スペイン人であったラモン神父は一六〇三年に博多のレジデンシアを開いて、「彼はそこの主任となって一六一〇年までの七年間、最高責任者として博多の教会とその周辺の宣教活動を担当した」。<sup>76</sup>九州北部を巡回し、キリシタンたちを訪問していると記録されているラモン神父が、筑前ないし九州のキリシタンの第一人者であった如水を訪問したこ

<sup>72</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、100。

<sup>73</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、23-24。

<sup>74</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、103。

<sup>75</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、97。

<sup>76</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、103。

## ダニエル・ストラック

とは当然なことだろう。逆にいえば、博多から追放されてしまったために博多伝道の再開をお願いする立場となっているラモン神父が近くにいる如水を訪問しなかったとは考え難い。いずれにせよ、確かなのは、神父たちが博多から追放されていたからこそ、如水にとって、太宰府は筑前国領において彼らと面会できる土地の一つであったのである。

如水と大鳥居との間に「こまやかな」関係があったのは前述の通りだが、如水とラモン神父との間にも親密な関係があった可能性は高いと考えられる。加藤清正が小西行長の宇土城を陥れた際に、ラモン神父はそこにいたために、彼は加藤軍に逮捕され、投獄された。ラモンがやがて釈放されたのは黒田如水の執り成しのためであった。<sup>77</sup> 更に、長政が名島城に入城した数ヶ月後に、早くも名島城に訪れた神父はラモンであった。チースリクによると、その際に、名島城で「〔黒田〕直之は上京中で留守にしていたが、彼の妻や家臣のためにミサをあげ、秘跡を授け、説教を行った」。<sup>78</sup> 如水とラモンが活動していた地域が重なっていたゆえに二人が頻繁に関わっていたことを考慮すれば、九州北部を巡回していたラモン神父が太宰府天満宮境内の如水庵を訪問した可能性が高いと考えられる。

しかし、そうだとすれば、ラモンの太宰府天満宮への訪問はなぜイエズス会の年報などに記録されなかったのだろうか。バチカンにとっては、キリシタンである如水が、異教の神殿である神社に住むことはキリスト教徒として相応しくなく、誤解を招くような行為と考えられたために、ラモン神父が太宰府天満宮に訪ねたとしても、そのような報告をするに至らなかったことは十分予測できる。

しかし、井上宮司の証言以外に、太宰府天満宮においてキリシタン活動が行われた証拠はあるのだろうか。松田の著書には、「十字架」がついている「天

<sup>77</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、102。

<sup>78</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、129。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

神像」<sup>79</sup>に関する記述は、次の通りである。

福岡に宿泊した一夜、福岡大学の吉岡先生が、福岡県太宰府神社には天神像の幅子<sup>80</sup>に十字架のついたものが所蔵されていることを話され、ぜひ調べるようにと奨められた。予定を変更し翌日早々に出発し、太宰府神社の井上正彦宮司を訪ねる。幸いにも縁者の方であったので、参拝の用件を話しお願いすると、いろいろとご厚情を頂き、まず切支丹関係の寄進状の巻物を拝見することができた。(中略)切支丹信仰と天神像のことをお話し、天神像を拝見させて頂いた井上宮司もここに十字架がありますと示される。檜造りの一五cmあまりの精巧に作られた天神像である。十字架が幅子に彫られ、白うるしで陰刻のなかがぬられている。拡大鏡で調べると江戸時代初期の三百五十年前後の作と推定した。よく調査すると幅子の裏に米粒ほどの長円形が彫られ、その内部にイエスをだいたマリア観音が巧みに彫られている。天神信仰に習合した切支丹たちの礼拝物であることを発見し、豊かな収穫を得た。天満宮でもそこまで気がついていなかったと、井上宮司にも大変お喜び頂いた。<sup>81</sup>

つまり、迫害が激しくなった隠れキリシタン時代の前期のことだろうが、日本のキリシタンたちは天神信仰をキリスト教に習合できる宗教として考えていた。その証拠は太宰府天満宮の財宝の中に見出せられる。該当の十字架が彫られている天神像が如水の時代のものであったか否かは不明だが、少なくとも天神宗教がキリスト教との習合の対象になっていたことは確認されているといえる。

<sup>79</sup> 「天神像」とは、天神崇拝のために作られた彫刻物である。太宰府天満宮は天神信仰の拠点の一つであるために、前代の天神像が秘蔵されていることは当然なことである。

<sup>80</sup> 「幅子」は巾子(こじ)のことだろう。平安時代、男性が被っていた冠の部分の名称で、髻(もとどり)を覆うための円筒状に上に突き出た部分である。下中、987に参照。

<sup>81</sup> 松田、127-128。

#### 四章 「三橋」の新たな解釈へ

この章では「三橋」の構造に込められている意味について検証したいが、その前に太鼓橋の特徴及び先行研究において説明されている太鼓橋の意義をまとめておく。「太鼓橋」(つまり中央部が高く盛りあり、橋脚によって支えられている半円形の橋)の原点は特定できないが、このような橋は日本中に散在している。表面上、「太鼓橋」は急な勾配をなしている中国の古い石橋に見えるが、造り方も、材料も、機能性も中国の「呉橋」とは異なるために、不思議な特徴をもつこの橋は日本独特のものであると考えられる。<sup>82</sup> 日本の橋の研究の第一人者として考えられる学者上田篤の仮説では、太鼓橋は唐時代の中国に見られた石造りの「呉橋」の影響を受けている日本の「反り橋」の一種である。

日本において最も有名な太鼓橋はおそらく高野山にある丹生都比売神社の太鼓橋、大阪市内にある住吉大社の反橋、そして太宰府天満宮の「三橋」のうちの二つの太鼓橋であるだろう。意外にもこれら四つの太鼓橋は、お互いに面識のあった二人の人物によって架けられたと考えられる。その二人とは、豊前秀吉の参謀として活躍した黒田如水と秀吉の側室の一人であった淀君であった。高野山にある丹生都比売神社の太鼓橋も、住吉大社の太鼓橋も、淀君が寄進したものであると伝えられている。この事実から、上田は淀君に関して「よほどタイコバシが好きだった」<sup>83</sup> として評価している。そして、上に説明したように、残りの太宰府天満宮にある二つの太鼓橋は如水が架けたものである。如水が太鼓橋を寄進した時期に、太鼓橋に関して淀君と会話を交わしたことはあったのだろうか。

慶長八年の正月に如水が大坂に行ったのは、秀吉の未亡人である北の政所に会うためであった。<sup>84</sup> 慶長八年十一月、北の政所は「高台院」と号した後

---

<sup>82</sup> 上田篤、176-179。

<sup>83</sup> 上田篤、180。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

に京都の高台寺に居を移す<sup>85</sup>ことになるが、この時点においては、まだ大阪城に住んでいた。その当時、淀君は亡き秀吉の命令に従い、子息の秀頼をつれて大阪城の西ノ丸に居住していた。<sup>86</sup>つまり、如水が大坂城を訪問したのは正妻の政所に会うためであったが、その際に淀君も大阪城にいたため、彼女にも面会する機会があったといえる。

住吉大社の太鼓橋は「慶長年間に淀君が奉納架替したものである」<sup>87</sup>と伝えられているために、太宰府天満宮の二つの太鼓橋より前に造られた可能性が高いと考えられるが、太宰府天満宮の二つの太鼓橋も同じ「慶長年間」に架けられた。結局、如水が淀君に面会したのであれば、その訪問は慶長七年十二月付の「三橋」寄進の僅か一ヶ月後のことであったことになる。いずれにせよ、住吉大社の「反橋」の方が頂が高く揚げられているとはいえ、太宰府天満宮にある二つの太鼓橋の形態は住吉大社の反橋の形態に酷似している。

上田は日本の「反り橋」全般に関する意味に関して、以下の通り説明している。

まことに奇妙なものだ。どうしてそんなにわたりにくい橋を、わざわざ水の上にかけるのか。(中略) もっとも、たいていのタイコバシは池にかかっていて、そのまわりにはちゃんと道がある。タイコバシをわたらなくても、目的地に到達できるのである。<sup>88</sup>

ということは、神宮に見える通常の太鼓橋は実用的な目的よりも、装飾的な目的が強いと考えられる。

しかし、太宰府天満宮の太鼓橋には、単なる装飾建築以上の、深い意味が込められていると考えられる。それは、神社における鳥居の役割を考慮すれ

<sup>84</sup> チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」、22; 棚町「黒田如水の連歌」、26。

<sup>85</sup> 桑田、111。

<sup>86</sup> 桑田、110。

<sup>87</sup> 『住吉大社略記』、30。

<sup>88</sup> 上田篤、176。

<sup>89</sup> 外山、16。

## ダニエル・ストラック

ば理解できる。神社における鳥居は、「神域と俗界とを区別する」<sup>89</sup> ためにあると説明されている。多数の日本の神社に見られる太鼓橋は、鳥居の機能性と同様に、参拝者に対して聖域に入るという意識を高めさせる役割を果たしている。太鼓橋が必要以上に渡り難い形態をなしているのは、橋の装飾性及び超越的な象徴性を強調するためである。ただし、日本の神社に見られる単独の太鼓橋は多数あるとはいえ、三つの橋の集合体となしている例は太宰府天満宮の三橋のみである。

「三」という数字は神道において特別な意味があるのだろうか。伝統的に「八幡」、<sup>90</sup>「八度拝」<sup>91</sup> などがあるために、「八」という数字は神道と密接に関わっている数字であるが、神道において「三」はそれほど特別視されてきたことはない。神社境内の灯籠の窓<sup>92</sup> や神社の紋章<sup>93</sup> には「三つ巴」の模様が時折見られるが、「三つ巴」の発想は三橋と関連があると思われない。三つの構成要素が均等に表象されている「三つ巴」と異なって、「太鼓橋・平橋・太鼓橋」という三つの橋の組み合わせは明らかに均等の原理に基づいていない。実際に、意味解釈を行う際に、三橋の不均等性こそが困難を招く事態である。(図4と図5を参照。)



図4 「三橋」の第一太鼓橋



図5 「三橋」の平橋

<sup>90</sup> 下中、1148。

<sup>91</sup> 下中、1149。

<sup>92</sup> 外山、25。

<sup>93</sup> 外山、189。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

また、「直橋」ともいわれる「平橋」が太鼓橋と組み合わせてあることも通常の太鼓橋の伝統の範囲に納まり切れない形態である。

人間が渡りやすくするために、通常の橋は常に平坦であることを考えると、平橋の特殊性は太鼓橋無しには成り立たないのである。一つの太鼓橋を渡る行為の目的が、参拝者に聖域に対して神性を高めさせることであれば、太鼓橋を三つ架けることによってその効果は三倍、または三倍以上になると考えられる。ところが、太鼓橋と太鼓橋の間に「平橋」を配置してしまえば、同効果が薄れると考えられる。太宰府天満宮の三橋には、なぜ平橋が入らなければならなかったのだろうか。

太鼓橋が超越的な存在を元々象徴する建築物であれば、平橋は超越的な存在ではなく、平凡な存在を意味していると推察できる。「超越性」と「平凡性」との差異を対比させている構造の特徴を説明せずに、三橋の謎めいた形態の問題を解明することは困難であると考えられる。

装飾的な橋には実用性を超えた深い意味が込められていると考えるのが自然であるが、宗教心の強い、芸術的表現を好んだ如水が橋の提供者だったからこそ、三橋に深い意味が込められていないはずがない。前章に説明した通り、三橋を寄進した際、太宰府天満宮の大恩人であった如水は同時に熱心なクリスチャンであったが、キリスト教の視点から三橋を眺めると、三橋の特徴を更に詳しく説明できるだろうか。三橋は「神橋」<sup>94</sup>や「御神橋」<sup>95</sup>とも呼ばれるが、神橋が三つの部分によって成り立っていることによってこの建築物集合体は「三位一体の神」の表現として捉えられる。

三橋のこの特徴を詳しく検証すれば、「三位一体の神説」は妥当に思われる。「三橋」の太鼓橋・平橋・太鼓橋という順はキリスト教の伝統における「父・子・聖霊」である「トリニティー」を表していると考えられる。神学的に三

<sup>94</sup> 天満宮境内にある三橋の案内板の場合。

<sup>95</sup> 「境内参詣」（無料配布物『太宰府天満宮&九州国立博物館』）の場合。又、外山、78。

ダニエル・ストラック

位一体の神のどの部分も平等であると考えられるが、人間との関わりにおいて三位一体の神の三つの形をなしている性格は異なる。人間はキリストの媒介なしで栄光に満ちている「天の父」に直接対面できない存在なので、人間との関わりにおいて、最も神秘的な存在である。それに対して「子」であるイエスは、人間の形になった神の性格なので、人間にとっては最も親しみやすい存在である。そして最後に「聖霊」は、霊であるために人間の肉身と異なる存在であるが、人間の心の中に住んでいる霊であるために「天の父」と比較して親しみやすい存在である。この通り、「三橋」は三位一体の神を象徴しているといえるのだろうか。

実際は、三橋において見られる二つの太鼓橋の形態は完全に同じということではなく、片方の太鼓橋が僅かに大きいのである。図6と図7を参考にすれば分かる通り、第一の太鼓橋の頂までには十八段があるのに対して、第二の太鼓橋には十六段しかないのである。<sup>96</sup>

太鼓橋の高さ及び急な勾配は霊的特異性を象徴している点を以前に説明したが、「第一太鼓橋」は「天の父」の極端な超越性を表現し、「第二太鼓橋」は「聖



図6 「三橋」の第一太鼓橋



図7 「三橋」の第二太鼓橋

<sup>96</sup> 正確に言えば、「第一太鼓橋」には、二段の土台の上に橋体を成す十六段の小さな段があるのに対して、「第二太鼓橋」には同様な二段の土台の上に十四段の小さな段がある。第一太鼓橋の二段の土台は図6の写真に写っていない。

## 黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

霊」の比較的親しみやすい超越性を表現している。日常的な存在を超える神秘性を表している二つの太鼓橋と比較して、平らに敷かれている平橋は人間となった神の存在、イエス・キリストを表現していると考えられる。

しかし、「三位一体」の神の概念は如水の時代に実際に教えられていたのだろうか。フロイスの『日本史』において、「一般的な説教方法」が紹介されている。その中に、「各自の理解力に応じて、三位一体の玄義、世界の創造（中略）デウスの御子の降生（中略）を説明する」<sup>97</sup>という記述がある。つまり、「トリニティー」という概念はその当時において珍しい神学的な用語ではなく、布教における基本的な主張点であった。布教に力を入れてきた如水は当然「トリニティー」という概念を把握していた。従って、寄進状において、彼が奉納した集合的建築物一帯を「三橋」と名付けた際に、その名称に対して当時のキリスト教徒が感じていた響きも大いに把握していたはずである。

「三橋」が「心字池」の上に架けられていることも「トリニティー説」の裏付けと見なせるだろう。池が「神殿」という聖域への障害物となっているのと同様に、人間の罪深い心は正しい宗教心への妨害である。しかし、三位一体の神は、三つの異なる神の性格によって聖所への道を人間に対して開くのである。太宰府天満宮の公式説明において、「橋を渡れば清められる」という箇所があるが、「トリニティー説」でも正にこの通りである。人間の心は神との関与を持たないままでは清められないが、神が予め配置した救いの道を歩めば、神との親しい関係を持つことは可能となる。キリスト教の熱心な伝道者であった如水は、このような信条を信じていたに相違ない。

しかし、もしこのような意味が三橋に込められているとすれば、なぜ如水はそれを明らかにしなかったのだろうか。当時の時代背景を理解すれば、そ

---

<sup>97</sup> 森岡、165-166。

## ダニエル・ストラック

の理由は明白になるだろう。前述した通り、如水が太宰府天満宮に対して「三橋」を寄進した際において、キリスト教自体はまだ禁止されてはなかったが、バテレン追放令は事実上、キリスト教会の急成長に対して歯止めをかける目的を有し、慶長元年（一五九七年）に二十六人のキリシタンが長崎の西坂で十字架に付けられ死刑された<sup>98</sup> ことにより、秀吉らのキリスト教に対する反感は明白であった。

そのような状況の中で、知恵と忍耐の持ち主であった如水は、水面下において様々なキリスト教的な活動を行っていた。信長から秀吉、秀吉から家康という時代の激しい変化を体験してきた如水は、反キリスト教的なムードは一時的なものだと考えていたのか。福岡城の瓦に隠されている十字架は如水のこのような考えを示唆しているかもしれない。

如水は、太宰府天満宮に三位一体の神を象徴する三橋の配置を行うことを通して、神道とキリスト教との習合を意図していたのだろうか。また、禁教令下のキリシタンに自由に訪問できる仮託礼拝物を与えようと考えていたのだろうか。あるいは、彼自身のキリシタンのアイデンティティを太宰府天満宮への寄進によって間接的に主張しようとしていたのだろうか。結局、キリスト教に対する熱意と派手な性格を有していたことを考慮すれば、名言されていない以上の三つの動機も可能であると考えられる。

しかし、三橋に込められている象徴性の検討よりも、三橋の存在自体が注目すべき点であるかもしれない。キリシタン大名の如水によって寄進された建築物であるために、三橋は江戸初期の福岡のキリスト教史を反映する、数少ない貴宝の一つである。美しいゆえに必見であることは一般に認められるが、如水が寄進した事実が認められるようになったら、太宰府天満宮の豊かな歴史に、新たな伝統が巧みに加えられると筆者は考える。

<sup>98</sup> チースリク『秋月のキリシタン』、138。

黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

参考文献

- 秋枝芳「秀吉時代の姫路城」太丸伸章編集『黒田如水・天下取りを演出した  
希代の軍師』学習研究社、1994年7月。
- 上田篤『橋と日本人』岩波書店、1984年。
- 上田正昭編『天満天神／御霊から学問神へ』筑摩書房、1988年4月。
- 大村貞文「筑前黒田藩のキリシタン武将とその子孫たち／プロテスタント教  
会との関係について」『全国かくれキリシタン研究会 第22回福岡大会 プ  
ログラム・研究論文集』かくれキリシタン研究会、2010年10月。
- 小野隆助「太宰府神社と黒田如水公との関係」『筑紫史談』第12集、1917年。
- 川添昭二、棚町知彌、島津忠夫共編『太宰府天満宮連歌史／資料と研究Ⅰ』  
財団法人太宰府顕彰会、1980年。
- 川添昭二、棚町知彌、島津忠夫共編『太宰府天満宮連歌史／資料と研究Ⅱ』  
財団法人太宰府顕彰会、1981年。
- 川添昭二、棚町知彌、島津忠夫共編『太宰府天満宮連歌史／資料と研究Ⅲ』  
財団法人太宰府顕彰会、1986年。
- 川添昭二、棚町知彌、島津忠夫共編『太宰府天満宮連歌史／資料と研究Ⅳ』  
財団法人太宰府顕彰会、1987年。
- 河音能平『天神信仰の成立／日本における古代から中世への移行』搞書房、  
2003年3月。
- 桑田忠親『淀君』日本歴史学会、1958年10月。
- 古賀康士「太宰府人物誌・資料室だより(66)」太宰府市市史資料室発行、  
刊行年月不詳。
- 小西なほみ「久留米とキリスト教(その一)」『雑草』第18号、2012年10月。
- 近衛信尹「三藐院記」近衛通隆、名和修、橋本政宣校訂『資料纂集 三藐院  
記』続群書類従完成会、1975年9月。
- 宮内澄夫「家訓」に見る領国の経営哲学」太丸伸章編集『黒田如水・天下

ダニエル・ストラック

- 取りを演出した希代の軍師』学習研究社、1994年7月。
- 坂井信生『福岡とキリスト教』海鳥社、2012年。
- 下中彌三郎編『神道大辞典』臨川書店、1990年7月。
- 上智大学編纂『カトリック 大辞典第1巻』富山房、1940年。
- 住吉大社社務所『住吉大社』大塚巧芸社、発行年月不詳。
- 住吉大社社務所『住吉大社略記』広正堂、1991年3月。
- 諏訪勝則「黒田官兵衛と和歌・連歌」『黒田官兵衛の魅力』姫路文学館、2011年。
- 外山晴彦監修『日本の神々がわかる神社辞典』成美堂、2013年。
- 太宰府天満宮、九州国立博物館、太宰府観光協会監修『太宰府天満宮&九州国立博物館』城野印刷所、2013年3月。
- 竹内理三、川添昭二共編『太宰府・太宰府天満宮史料卷十六』太宰府天満宮、2000年。
- 棚町知弥「黒田如水の連歌」『近世文芸資料と考証(五)』1966年。
- 棚町知弥「大御神忌と連歌 附連歌屋考(一)／近世太宰府天満宮連歌史・その二」『有明工業高等専門学校紀要』創刊号、1966年3月。
- 辻善之助『鹿苑日録第四卷』太陽社、1935年。
- 永留久恵『海神と天神／対馬の風土と神々』白水社、1988年。
- 日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局、1991年。
- 姫路市観光交流推進室編「その男、天下に秘する野望あり／智謀の将 黒田官兵衛」2013年4月。
- 姫路市観光交流推進室編「智謀の将 黒田官兵衛／姫路から天下に翔けた男」2013年4月。
- 広渡正利「黒田家の神仏崇敬について／彦山と太宰府天満宮」『宗教文化』第45号、1985年。

黒田如水と太宰府天満宮／彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に

「福岡城 瓦に「十字架」／黒田如水、長政 信仰を示す？」『西日本新聞』  
2010年5月17日（夕刊）。

藤野保「九州と外交・貿易・キリシタン（Ⅱ）／九州近世史研究叢書第六  
巻」国書刊行会、1985年2月。

松田重雄『切支丹灯籠の謎』同信社、1976年。

三浦明彦『西日本人物誌〔7〕／黒田如水』西日本新聞社、1996年。

本山一城「黒田官兵衛とはどのような人間だったのか」『黒田官兵衛／鮮烈  
な生涯』晋遊舎、2013年。

森岡清美「体制宗教と地下信仰」笹原一男編『日本宗教史Ⅱ』山川出版社、  
1977年12月。

安高啓明「キリシタン信仰」『黒田官兵衛の魅力』姫路文学館、2011年。

結城了悟『キリシタンになった大名』聖母文庫、1999年。

ユベルト・チースリク「秋月のキリシタン」『キリシタン研究』第37輯、  
2000年。

ユベルト・チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」『キリシタン  
研究』第19輯、1979年。

ユベルト・チースリク「マトス神父の回想録」『キリシタン研究』第24輯、  
1984年。

De Luca, Renzo, S.J.「博多のキリシタン」大庭康時他編『中世都市・博多を  
掘る』海鳥社、2008年。

# 北九州市立大学 外国語学部紀要

---

第 136 号

2013 年 12 月

---

## 目 次

### 【論文】

Locating the Aesthetic in Shakespeare's *Macbeth* … Adam Hailes… 1

黒田如水と太宰府天満宮

——彼の天神信仰と「三橋」寄進を中心に——

… ダニエル・ストラック … 19

桃花源，中国士人心灵的最终归宿

——陶渊明作品人文价值再认识

… 葉 言 材 … 51

近世日朝貿易と被執取引

… 山 本 進 … 1

北九州市立大学

北九州市立大学外国語学部紀要（第136号）

2013年12月31日印刷

2013年12月31日発行

発行所 北九州市立大学外国語学部  
北九州市小倉南区北方4-2-1

印刷所 株式会社福田印刷  
北九州市門司区原町別院3-5  
電話 (093) 371-3231 番

# BULLETIN

FACULTY OF FOREIGN STUDIES  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

---

No. 136

December 2013

---

## CONTENTS

### 〈Article〉

Locating the Aesthetic in Shakespeare's *Macbeth* ... Adam Hailes ... 1

Kuroda Josui and Dazaifu Tenmangū:

With special reference to his Tenjin Faith

and donation of the "Three Bridges" ... Daniel C. Strack ... 19

"Taohuayuan" — The Final Refuge for the Souls  
of Chinese Intellectuals — A new understanding  
of the humanistic values of Tao Yuanming's work

... Ye Yancai ... 51

Trading on a Deferred Payment Basis

between Japan and Korea in 17th and 18th Centuries

... Susumu Yamamoto ... 1

THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

Kitakyushu, Japan